

第21回 第3章 近世社会の形成と庶民文化の展開

幕府政治の進展と元禄文化

執筆・講師
山本博文

学習のねらい

4代将軍の徳川家綱は、末期養子の禁を緩めて大名の改易を減らし、殉死を禁止した。この政策の変化は、武断政治から文治政治への転換と考えられている。家綱の弟の徳川綱吉は、5代将軍になると、儒学を奨励したほか、生類憐みの令を出した。これらの政策が、何を目的としたものかを理解する。

武断政治から文治政治へ

江戸幕府初代将軍の徳川家康から、3代将軍の徳川家光^{とくがわいさみつ}までは、大名の改易や減封がしばしば行われ、多くの牢人が出て、社会不安のもととなった。特に、家光の死後、軍学者の由井正雪^{ゆいしょうせつ}が牢人たちを指導して反乱を起こそうとしたことから、幕府は、末期養子の禁を緩め、大名の改易を減らそうとした。また、当時、大名が死ぬと家臣もその後を追って自害する殉死の風習が流行したことから、殉死も禁止した。また、社会秩序を乱す「かぶき者」の取り締まりを行うなど、幕府の政策が殺伐とした世相を改めようとするものによって変わっていった。これが、武断政治から文治政治への転換の本質である。

綱吉の政治と正徳の治

5代将軍の綱吉^{つなよし}は、学問を好み、湯島に建てた聖堂^{はやしのみやう}を林信篤に管理させ、江戸城では大名を相手に自ら儒学を講義した。また綱吉は、仏教にも帰依し、1685年から何度も、極端な動物愛護令である生類憐みの令^{しょうるいあわれ}を出した。特に犬の保護を命じ、中野に大規模な犬小屋を建設し、野犬を収容した。中には捨て子の保護を命じるなど、評価すべき点もあったが、違反者は厳しく罰せられたので、反感を持つ者も多かった。

綱吉は、寺院の造営や改築などを進めたので、幕府の財政は次第に乏しくなった。このため、勘定吟味役^{かんじょうぎんみやく}（のち勘定奉行）の荻原重秀^{おぎわらしげひで}は、慶長金銀を改鑄して品質の悪い元禄金銀を発行し、幕府の歳入を増やした。

6代将軍の徳川家宣^{いえのぶ}が後を継ぐと、生類憐みの令は廃止された。家宣の儒学の師であった新井白石^{にいしつ}は、7代将軍の家継^{いえつぐ}の時代まで政治に数々の提言を行った。これにより元禄金銀はもとの慶長金銀の品質に戻り、貿易政策では、1715年、海舶互市新例^{かいぱくごししんれい}が出され貿易額が制限された。

また、朝鮮との国書に「日本国王」号が用いられ、朝鮮通信使の待遇は簡素化された。朝廷には新しい親王家である閑院宮家が創立された。これらの政策は、「正徳しょうとくの治ち」と呼ばれ、高く評価されている。

元禄文化

17世紀後半は、文治政治のもとで社会が安定し、経済がめざましく発展して三都（江戸・京都・大坂）を中心とする都市が発達した。このころ、経済・文化の先進地であった上方かみがたを中心に元禄文化と呼ばれるすぐれた文化が生まれた。これまでの文化は、公家や武士といった上層階級のものであったが、元禄文化は三都の町人やその近郊の富農が享受し、また特に個人の内面性を表現する成熟した文化となった。

文学では、大坂の町人の井原西鶴いはらさいかくが浮世草子と呼ばれる小説を書き、武士出身で上方で活躍した近松門左衛門ちかまつもんざえもんが人形浄瑠璃や歌舞伎の脚本を書いた。これらの作品は、現実の世界を舞台とし、金銭に執着する人間模様や恋愛を貫く男女の心中事件などを描いて、人々の共感を得た。松尾芭蕉まつお ばしょうは、全国を旅してすぐれた俳句を詠み、連歌から分かれた俳諧を格調高い芸術に高めた。歌舞伎は、演劇としての完成度を増し、上方に坂田藤十郎さかたとうじゅうろう、芳沢あやめよしざわ、江戸に市川団十郎いちかわだんじゅうろうらの名優が出た。

自然科学の分野でも、貝原益軒かいばらえきけんや稲生若水いのうじやくすいによって本草学ほんぞうがくが発達し、宮崎安貞みやざきやすただは農民のために農作物の新しい栽培技術を紹介した。渋川春海しぶかわしゅんかいは、天文学を研究し、従来の暦を観測によって修正し、貞享暦じょうきょうれきを作った。